



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	「体育における人間形成」概念の構造化に関する方法論的研究
Author(s)	阿部, 悟郎; 大槁, 道雄
Citation	東京学芸大学紀要 . 第 5 部門 , 芸術・体育, 41: 153-160
Issue Date	1989-10
URL	http://hdl.handle.net/2309/4914
Publisher	
Rights	

「体育における人間形成」概念の構造化に関する 方法論的研究

阿部 悟郎・大橋 道雄

保健体育学*

(1989年6月10日受理)

1. 序 論

1.1 緒 言

「体育」が「教育」の範疇において論じられる場合、「人間形成」の問題は不可避なものと考えられる。昨今の「体育」の学的研究において、「体育における人間形成」の問題を取り扱った研究は数多く認められるが、その論ずるところは明確であるとは言い難い¹⁾。従って、「体育における人間形成」の論理を明確化する必要が認められる。そこで、論理的認識の構築における「概念」論の有効性²⁾から、「体育における人間形成」の問題を「概念」の位相において考察する必要が認められる。

一般に、「概念 (concept)」は、「思考活動の基本的な形態」として捉えられ、「具体的なものからの抽象によって形成される」としている³⁾。従って、「体育における人間形成」に関して、「概念」の位相において研究する場合、その具体的・現実的な「体育における人間形成」事象を抽象化する操作が重要となる。「抽象 (abstraction)」は、「全体としての事物の表象にふくまれる諸徴表のなかから、一つまたは、数多を分離して、それだけを独立に思惟の対象とする精神作用」として捉えられる⁴⁾。その場合、他の諸徴表は「捨象」されることとなる。そこで、「概念」を、「形相」因と「質料」因との構造態として認識し⁵⁾¹³⁾、その何れかを「捨象」の対象とするのである。ところで、「形相 (form)」は「構造上の形式」として⁶⁾、「質料 (matter)」は「素材」として捉えられる⁷⁾。つまり、「思考の形態」としての「概念」は、「思考の形式」と「素材」としての意味・内容」とに分離されるものと思われる。そして、「概念」そのものに内在する普遍性の所在は、前者に求められ得る。それは、後者、すなわち、「素材としての意味・内容」は、それらが生起する文化的・社会的背景に制約を受け、比較の対象としては不適當であると考える所以である。このような認識から、本研究においては、「体育における人間形成」概念の「思考の形式」を考察の対象とする。

「体育における人間形成」は、その名辞の上から「体育」、「における」、「人間形成」に区別されるものと考えられる。「における」は、「体育」、「人間形成」の二者の場所的關係を示唆し、「人間形成」への限定詞的な役割と解釈される。そこで、「人間形成」を「体育」的に限定することにより、「体育における人間形成」が生起すると考えられる。これにより、「体育における人間形成」概念は、「人間形成」に関する認識より演繹され得るものと考えられる。そこで、「体

* 東京学芸大学 (184 小金井市貫井北町4-1-1)

育における人間形成」概念の究明の為に、「人間形成」概念の明確化が肝要となる。それでは、それが如何なる知識体系によって明確化され得るのか、が問題となる。現存する知識体系において、その問題に関して最も適切と考えられる「学」領域は、「教育学」であり、とりわけ「教育哲学」であると考えられる。それは、「教育学」が「人間形成の論理的な本質把握にとどまらず、その実践的具現を本務とするもの」²⁰⁾であり、その哲学知が「教育哲学」である²¹⁾という認識に依るものである。

以上から、「人間形成」概念を究明する為には、「教育哲学」的知見が有効と考えられる。そこで、「体育における人間形成」概念の明確化の為の分析資料を「教育哲学」に求める。それは、比較・類化という手順により一般的性質を抽出し、「概念」の「内包」を獲得することを試みることである⁷⁾。それによって提示された「教育哲学」的な「人間形成」概念の論理的模型を「体育」に展開することによって、「体育における人間形成」の概念的構造化の方法論の提示を試みる。

1.2 研究の目的および手順

本研究の目的は、「体育における人間形成」の概念的確立の為に、「教育哲学」における「人間形成」概念の論理構造を明確にすることにより、「体育における人間形成」の概念的構造化の方法論を提示することである。一般に、概念形成は、比較、抽象、概括の三段階を経た帰納的推論に依拠する¹⁹⁾。その場合、比較の段階において収集された資料としての知見の選定基準に関する妥当性の検討が必要とされる。本研究においては、「人間形成」をキーワードとして収集された文献の論者を選定し、その論ずるところを文献分析により明確化し、比較対象資料とした。その為に、「教育哲学」領域の50人²²⁻⁷¹⁾の論者の「人間形成」概念の構造を文献を中心として分析し、「教育哲学」的な論理構造を抽出し、それに立脚して「体育における人間形成」概念の構造化に関する方法論の提示を試みた。

2. 本 論

2.1 「人間形成」概念の論理構造に関する教育哲学的検討

多様な「特殊」の相からその一般性を導くことによって、論理上の任意性を排除し得る可能性が認められる。ここでは、50人の論者ごとに、その「人間形成」概念に関する論理構造を分析し、それらの知見をまとめることによって、「人間形成」概念に関する教育哲学的な論理構造の模型の提示を試みた。そして、方法的に、次の二つの観点からまとめることとした。それは、第一に、「人間形成」に関する論理構造上の認識契機に関してであり、第二に、「人間形成」概念の論理構造に関してである。

2.1.1. 「人間形成」に関する論理構造上の認識契機

本研究における分析の結果、50人の論者の「人間形成」に関する認識契機が次の二つに分類された。第一に、「存在性」の契機である。つまり、「存在性」の契機とは、「人間形成」において「形成」されつつある「人間」、或るいは、「生成」しつつある「人間」に関する「事実」についての存在理解である。第二に、「課題性」の契機である。「課題性」の契機とは、「人間形成」の事象における規範的な課題を扱い、そこに付与される「目的」や「理念」に関する「価値」認識に依拠する。「人間形成」の事象に内在する対象性、或るいは、相対性によって生起する「価値」認識に依拠するものであり、それ自体、「目的」、「理念」等を構成する基礎的認識であると

言える。

これらの、「人間形成」に関する認識上の契機、すなわち、「存在性」と「課題性」は、それ自体、論理の構成上、「存在性」の論理と「課題性」の論理を構成し、それらの二つの論理により、「人間形成」概念が構成されるものとして捉えられる。換言するならば、「存在性」と「課題性」は、「人間形成」概念を構造化する上での主要契機であると解釈される。

2.1.2. 「人間形成」に関する論理構造

ここでは、上で明確化された論理構造上の二つの主要契機の間を課題として扱う。即ち、「人間形成」における「存在性」の論理と「課題性」の論理との相互の関係についてである。「人間形成」に関する論理構造は、次の二つの型に分類されると思われる。第一に、「存在性」と「課題性」を論理上の対立契機として捉え、それらを止場・統合することにより「概念」を構造化する型である^{註1)}。第二に、「課題性」を上位に位置付け、「存在性」を「課題性」へと統合することによって「概念」を構造化する型である^{註2)}。

そこで、これらの二つの論理構造の型の相違に関して考察を加える必要がある。両者の型の相違は概念構成契機相互の関係に起因する。つまり、二つの概念構成契機を論理上、同位に置くか、位置関係を付与するか、という問題である。前者の立場は、人間理解と規範的課題認識を同位に置き、その論理的統合により概念を構造化するというものであった。後者の立場は、規範的課題認識を、論理上、上位に位置付けるものであった。従来の教育学上の立場から、これらの論理構造上の相違を解釈するならば、前者は、「人間中心主義」的、或るいは、「生成主義」的であり、「人間形成」概念は人間教育概念に近接し、後者は、「社会中心主義」的、或るいは「形成主義」的であり、「人間形成」概念は陶冶概念に近接すると解釈される。つまり、前者を、「人間形成」の「実体」相に関する「抽象概念」として、後者を「目的概念」として捉えられるとしても、これらの二つの型は、その範疇が異なるが故に、両者の論理的裁定は不可能となる。ただし、前者の型によって構造化される「人間形成」概念は、後者のそれに比して、広義な概念として考えられる。つまり、前者のそれが、上位の概念であると解釈される。また、概念形成の第一義的な課題であるところの「規定性」⁹⁾を考えた場合、抽象の度合いが問題の一つとして生じてくるものと考えられる。後者において統合原理が求められる課題的思考は、当然、社会や文化のもたらす所与性に依拠せざるを得ないと考えられ、抽象度に関しては、前者が高次であると考えられる。ただし、抽象の程度による有効性の即断は早計と言える⁹⁾。しかしながら、概念論上、諸事物に関する一般的な概念を形成する為には、抽象度が高い程有効であると言える¹⁵⁾。そして、「数の論理」が論理的有効性の証左として妥当とは言いがたいが、本研究における分析の結果、八割強の論者が前者の立場に立つことを考え併せて、「人間形成」概念の論理構造に関する教育哲学的なモデルを、前者のモデルに焦点を当てて論を展開する。

2.2 「人間形成」概念に関する教育哲学的論理構造

本研究において提示された「人間形成」概念の論理構造に関する教育哲学的なモデルにより、「人間形成」概念は、次の二つの論理的契機から構造化されることが示唆された。第一に「人間形成」に関する「存在性」の論理であり、第二に、「人間形成」に関する「課題性」の論理であ

註1) この立場の論者は次の通りである； 22)23)24)26)27)28)29)30)31)32)33)34)35)38)39)40)

41)42)43)44)45)46)47)48)49)50)51)52)53)54)55)56)57)58)60)61)64)65)66)70)71)

註2) この立場の論者は次の通りである； 25)36)37)59)62)63)67)68)69)

る。これらの二つの論理を対立契機として、それらを止揚・統合することによって、「人間形成」概念が構造化される。

そこで、本研究における、これまでの分析・検討において明確化された「人間形成」概念の論理構造を「体育」学領域へと展開することによって、「体育における人間形成」概念の論理構造の提示を試みる。

2.3 「体育における人間形成」概念の教育哲学的構造化

ここでは、先に明らかとなった「人間形成」概念の論理構造に基づいて、「体育における人間形成」概念の構造化を試みる。

そこで、上の論旨を踏まえて、「体育における人間形成」概念の構造化の為には、次の示す三つの段階を踏む必要が認められる。すなわち、第一に、「体育における人間形成」に関する「存在性」の検討である。第二に、「体育における人間形成」に関する「課題性」の検討である。第三に、「体育における人間形成」に関する「存在性」と「課題性」の論理的止揚・統合による「概念」の構造化である。以下、その段階に従って、「体育における人間形成」概念の論理構造の獲得を試みる。

2.3.1. 「体育における人間形成」に関する「存在性」の論理

「体育における人間形成」に関する「存在性」の論理は、「体育」という事象において生成、或るいは、形成されつつある「人間」に関する存在理解である。人間存在については、歴史的に「哲学」が扱ってきた難解な問題であり、その認識は多岐に亘る。それらは、その限定された存在形態において多分に真理を分有し得る¹⁾。その全体性に関する認識を問題とする必要がある故に、それらの関係を基に、より真理の全体像に近似と考えられる知見の探究が肝要と言える。それは、推論と批判を繰り返すことに依る。全体的存在としての人間形成に関する認識は、それ故に、分析的認識、或るいは、記号的認識に依拠せざるを得ない。従って、全体的存在としての人間の象徴的記号としての、存在 A_1 , A_2 , A_3 …の関数的認識が成立し得よう⁵⁾。体育学上の研究においても運動、或るいは、遊戯、スポーツの中の「人間」に関する存在理解を究明することが肝要と言えよう。

2.3.2. 「体育における人間形成」に関する「課題性」の論理

「体育における人間形成」に関する「課題性」の論理は、価値や理念に基づいて展開される規範的な課題認識である。凡そ、思想は価値を産出し、その方向性に統制を付与する。体育思想がその在り方に影響を与えてきたのは、体育思想史の示すところである⁴⁾。従って、その根底には価値の問題が存在し、その論理的基盤における対象性を無視し得ない。このことは、「課題性」の論理が哲学的な原理認識への依拠を示唆するものと思われる。

2.3.3. 認識契機の論理的統合と「概念」の構造化に関する方法論的検討

「体育における人間形成」概念の構造化の為の第三の手續きとして、前述の二つの論理を対立契機として統合する必要が認められる。そこで、二つの対立契機の論理的統合に関する厳密な方法論的検討が重要と言えよう。多様に認められ得る方法論の中から、本研究においては、方法的に、初歩的な数学的手法を導入する。「意味・内容」は可変的であり、それらを論理の上で扱う為には、高い次元へと抽象化し、それらの数理的に認識する必要が認められよう。そこで、方法的に、「体育における人間形成」に関する「存在性」の論理と「課題性」の論理を変数として認識することとする。すなわち、前者を変数 x として、後者を変数 y として認識する。そして、前述の二変数の「関数形式」¹⁰⁾をもって概念の構造化を試みる。この二変数間の関係によって構造化される「人間形成」概念は、必然的に二次元的な平面として提示されることが可能となる

う。即ち, X軸を「体育における人間形成」に関する「存在性」の論理として, Y軸を「体育における人間形成」に関する「課題性」の論理として認識することにより「体育における人間形成」概念を二元的に構造化することが, 形式論理上, 可能となるものと考えられる。そこで, 仮に, X軸上に論理 x_1, x_2, x_3 , Y軸に論理 y_1, y_2 という「意味・内容」を伴った任意の変数がプロット(plot)されるとする(図.1.)。それに従って, X軸とY軸とを基礎次元とした論理的な座標平面が獲得され, そこには, x_1y_1 (p), x_1y_2 (q), x_2y_1 (r), x_2y_2 (s), x_3y_1 (t), x_3y_2 (u) といった合計六つの点が獲得される。これらの点は, 「意味・内容」を伴っているため, それ自体は一つの観念(idea)としてのp, q, r, s, t, u, として捉えられる。すなわち, それらが, 各々に対して付与された名辞であると共に, 論理上の操作によって獲得された小概念を形成するものと理解され得る。従って, 各々の小概念が平面上に点として示されたとき, その点を線によって連結することによって獲得される平面が, 論理上, 「体育における人間形成」の概念領域であると考えられる。ただし, そこには難解な問題が存在する。座標軸上の数量関係における連続性の問題に起因する。すなわち, 座標軸上にプロットされた「意味・内容」相互の論理的連続性が第一に問題とされ, それに次いで, それらの「意味・内容」相互の関係を数量概念へと抽象化し得るか, が問題とされる。

そこで, 暫定的に, 座標軸の論理に立脚して, 「概念」の平面的図式化を試みる。それにより, 「体育における人間形成」概念の枠組が, そのx値とy値の関係によって獲得されるものと考えられる(図.2.)。前述の操作上の五変数を用いて考察すれば, $3x \times 2y = 6xy$ という演算からも明らかな通り, $x_1y_1, x_1y_2, x_2y_1, x_2y_2, x_3y_1, x_3y_2$ といった合計六つの概念的枠組が提示されるものと考えられる。これらの概念的枠組において, 「体育における人間形成」概念の認識上の諸原理がp, q, r, s, t, uとして獲得される。これは, 抽象度の高い認識上の理念としての原理である。これに基づいて, 具体的・現実的な「意味・内容」を演繹し実践性のある原理が $p_1, p_2, p_3 \dots$ という具合に派生的に獲得される可能性が認められる。規約的¹²⁾に前者の原理に「認識原理」, 後者の原理に「実践原理」という名辞を付与する。認識原理それ自体は, 前述の通り,

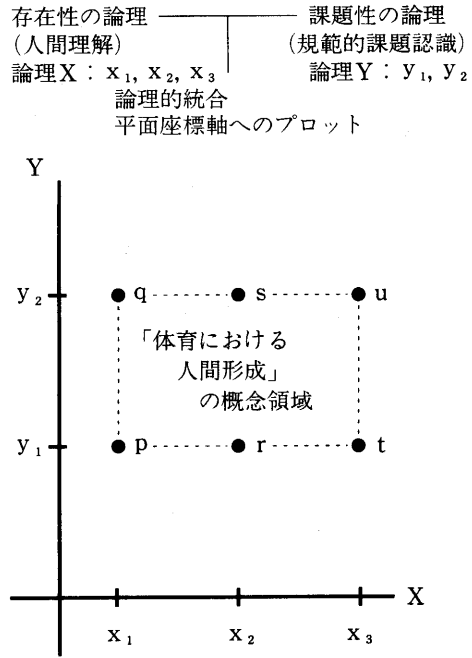


図1 「体育における人間形成」概念の座標的認識

そこで, 暫定的に, 座標軸の論理に立脚して, 「概念」の平面的図式化を試みる。それにより, 「体育における人間形成」概念の枠組が, そのx値とy値の関係によって獲得されるものと考えられる(図.2.)。前述の操作上の五変数を用いて考察すれば, $3x \times 2y = 6xy$ という演算からも明らかな通り, $x_1y_1, x_1y_2, x_2y_1, x_2y_2, x_3y_1, x_3y_2$ といった合計六つの概念的枠組が提示されるものと考えられる。これらの概念的枠組において, 「体育における人間形成」概念の認識上の諸原理がp, q, r, s, t, uとして獲得される。これは, 抽象度の高い認識上の理念としての原理である。これに基づいて, 具体的・現実的な「意味・内容」を演繹し実践性のある原理が $p_1, p_2, p_3 \dots$ という具合に派生的に獲得される可能性が認められる。規約的¹²⁾に前者の原理に「認識原理」, 後者の原理に「実践原理」という名辞を付与する。認識原理それ自体は, 前述の通り,

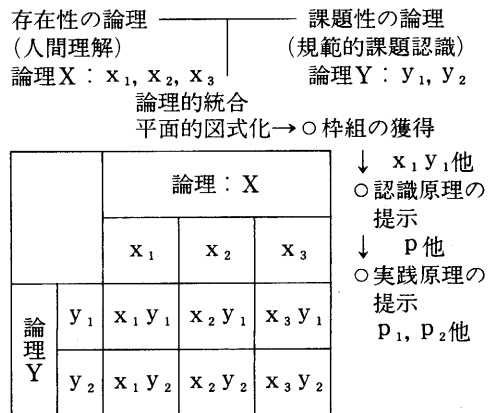


図2 「体育における人間形成」概念の平面構造的認識方法

高次の抽象度において論じられる為、認識原理の獲得をもって、「体育における人間形成」概念が明確化されると言えよう。ここにおいて、残された問題は、認識原理相互の関係についてである。これについては、任意の変数に付与される「意味・内容」相互の問題へと還元される為、認識論上の問題と言い得る。また、実践原理に関しては、この認識原理から実践原理を導く操作において、多分に恣意性が入り込む危険が認められよう。

3. 結 語

「体育における人間形成」概念の確立の為に、基礎的知見を「教育哲学」に求め、その論理構造の典型的な模型に従って、「思考の形式」としての「体育における人間形成」の論理構造を提示した。「体育における人間形成」概念の確立の為の一つの手法として、教育哲学に方法論上の基礎的知見を求め、「体育における人間形成」概念の二元的構造化に基づいて、概念的枠組が獲得されることが示唆された。この認識に立脚して、「体育における人間形成」概念が次の手順によって明確化される；

- 1) 「体育における人間形成」に関する「存在性の論理」の提示
- 2) 「体育における人間形成」に関する「課題性の論理」の提示
- 3) 「存在性の論理」と「課題性の論理」の二元的統合による概念的枠組の獲得
- 4) 概念的枠組における「認識原理」の提示
- 5) 「認識原理」からの派生的演繹による「実践原理」の提示

しかしながら、些か形式論理に陥り、その具体的展開と「学」的有効性に関しては検討の余地が多分に認められるものと思われる。従って、批判・検討を繰り返し、より確立した方法論を探究する「学」的努力が必要となろう。

参考・引用文献

- 1) 阿部悟郎・大橋道雄：「体育における人間形成の概念に関する研究—『体育の原理』3号を中心として」東京体育学研究, 14: 6, 1987.
- 2) 安藤孝行：形而上学, 勁草書房, 1967, p.34.
- 3) B.Russell (市井三郎訳)：西洋哲学史(上), みすず書房, 1958, p.170.
- 4) C.C. Cowell・W.L. France: Philosophy and principles of physical education, Prentice-hall, inc., 1963. p. 4.
- 5) E. Cassirer (宮城音弥訳)：人間—この象徴を操るもの, 岩波書店, 1982. p.37.
- 6) E. Cassirer (生松敬三訳)：象徴形式の哲学(1・言語), 1972. p.330.
- 7) E. Cassirer (山本義隆訳)：実体概念と関数概念, みすず書房, 1979. p. 4.
- 8) 前掲書7), p. 5.
- 9) 前掲書7), p. 6.
- 10) 前掲書7), p.362.
- 11) H. Lenk (佐藤臣彦訳)：「スポーツ哲学における人間学」体育・スポーツ哲学研究, 4・5: 27, 1983.
- 12) J. Hospers (西勝・中本訳), 意味論, 分析哲学入門1, 法政大学出版局, 1971. p.64.
- 13) 金子武蔵：「形而上学」哲学の諸部門, 哲学講座VI, 筑摩書房, 1951. p.44.
- 14) 下仲邦彦(編)：哲学事典, 1977. pp.216-17.

- 15) 前掲書14), p.217.
- 16) 前掲書14), p.409.
- 17) 前掲書14), pp.608-09.
- 18) 前掲書14), p.937.
- 19) 武市健人他: 論理学概論, 福村出版, 1975. p.26.
- 20) 神保博行: 教育哲学の基本的考察, 芦書房, 1968. p.31.
- 21) 前掲書20), p.49.

※分析対象文献(紙数の関係により, 著者名, 著書名のみ記す)

- | | |
|---|---|
| 22) 赤堀孝: 教育学原理 | 47) 工藤泰正: 教育原理概説 |
| 23) 赤松昂: 教育原理の研究 | 48) 前田博: 教育本質論 |
| 24) 麻生誠他: 変革期の人間形成 | 49) 増淵幸男: 教育学の論理 |
| 25) 遠藤邦三他: 現代教育原理の研究, 新教育原理 | 50) 松澤光雄: 教育原理 |
| 26) 現代教育科学研究会: 教育の原理とその展開 | 51) 南澤貞美他: 人間形成原理 |
| 27) 林信弘: 教育の哲学的探究 | 52) 源了圓: 文化と人間形成 |
| 28) 平野智美他: 人間形成の思想 | 53) 森昭: 現代教育学原論, 現代教育思潮, 今日の教育原理, 教育人間学, 教育思想の哲学的探求, 人間形成原論, 人間の形成, 「現代教育の哲学的基礎」, 「教育の根本問題」, 「人間危機への対応」 |
| 29) 本田時雄他: 現代社会の人間形成 | 54) 村田昇: 教育哲学 |
| 30) 細谷恒夫: 教育の哲学, 「学校教育」, 「人間存在における理念と自然」, 「教育における価値の問題」, 「教育哲学」, 「教育哲学の課題と方法」, 「社会と人間の形成」, 「人間形成」 | 55) 中沢次郎他: 教育原理要説 |
| 31) 福田誠治: 人間の能力と人格 | 56) 野村新他: 人間形成の研究 |
| 32) 古味亮通他: 教育観の探究 | 57) 大浦猛: 教育原理, 「社会的人間形成としての教育」 |
| 33) 藤田健治: 人間形成と実存哲学, 哲学的人間学, 歴史的世界と人間存在 | 58) 岡林桂夫他: 教育の原理と心理 |
| 34) 今田竹千代他: 人間形成の原理 | 59) 瀬沼克彰: 変動期の人間形成 |
| 35) 稲富栄次郎: 教育目的論, 教育の本質 | 60) 志賀英雄: 教育原理の探求 |
| 36) 井上英治: 人間形成の探求 | 61) 下山田裕彦: 現代の教育と人間形成, 現代社会の点検と人間形成, 教育の理想と人間形成 |
| 37) 井坂行男: 人間形成 | 62) 砂沢喜代次: 「人間形成における情緒性の位置」 |
| 38) 伊藤源一郎: 教育の本質原理 | 63) 鈴木祥蔵: 現代教育科学原論 |
| 39) 海後勝雄: 教育哲学入門, 教科と人間形成 | 64) 竹中暉雄: 人間性追求の教育学 |
| 40) 金子光男他: 教育学の展開 | 65) 田中未来他: 教育原理 |
| 41) 金丸弘幸: 教育原理 | 66) 田浦武雄: 教育哲学原理 |
| 42) 狩俣恵常他: 現代教育原理 | 67) 時実利彦: 人間形成の基本問題 |
| 43) 木原健太郎他: 現代社会の人間形成 | 68) 豊沢登: 人間の科学と人間の形成 |
| 44) 菊地幸子他: 人間形成の社会学 | 69) 上田薫: 教育哲学, 人間形成論序説 |
| 45) 喜多川忠一: 人間形成と社会形成, 人間の生成と形成 | 70) 山本恒次: 生涯教育の視点に立つモラロジー人間形成学 I・II |
| 46) 高山岩男: 教育哲学, 哲学的人間学 | 71) 山科三郎: 人間発達の哲学 |

A methodological study on the structurization of the concept of “building a human character in physical education”

Goro ABE and Michio OHASHI

Department of Health and Physical Education

Synopsis

The purpose of this study was to clarify the methodology of the structurization of the concept of “building a human character in physical education” by logically analyzing the writings and articles concerned with the academic area of “philosophy of education”.

The result of the study of this kind will assist construction concerned with the methodology of structurization of the concept of “building a human character in physical education” as below ;

1. Logical investigation about the ontological understanding of “building a human character in physical education”
2. Logical investigation about the axiological understanding of “building a human character in physical education”
3. Acquisition of the framework of the concept by the logical integration of the ontological understanding and the axiological understanding of “building a human character in physical education”
4. Logical acquisition of the cognitive principles of the concept of “building a human character in physical education” under the framework of the concept
5. Logical acquisition of the practical principles of the concept of “building a human character in physical education”, which deduce from the cognitive principles